

のぼりた 登り田遺跡発掘調査説明会資料



播磨国府系瓦（古大内式）



土坑 (SK350) 馬の頭蓋骨出土状況（南西から）

播磨国府系瓦 この瓦は、播磨地域の国衙や駅家、寺院で使用される奈良時代の軒丸瓦です。播磨国府系瓦（古大内式瓦）と呼ばれており、中心に6つの蓮子と13弁の細弁の模様が特徴です。

2. 馬の骨と土馬

土坑 (SK350) から馬の頭蓋骨が出土しました。いっしょに出土した土器から飛鳥時代であり、建物群がつくられ始めたころに、馬を埋葬したと思われます。

また、包含層から土師質の土馬が出土しています。土馬は雨乞いや穢れを祓う祭祀のために、馬を模して作られた形代です。左前脚で脚の上にある円形のスタンプ紋で手綱を表現しています。飛鳥～奈良時代と考えられます。

まとめ

調査の結果、配置された建物や瓦・緑釉陶器・製塩土器・墨書土器・土馬などの出土遺物から、官衙的な要素を備えた施設があったことが分かりました。

古代において登り田遺跡周辺は播磨国飾磨郡美濃里はりのくにしかまぐんみののさとと考えられています。8世紀前半に編纂された『播磨国風土記』には「美濃里 継潮」と記載のあること

から、これに関連する施設が考えられます。

今後の調査で、遺跡の全容がさらに明らかになって行くでしょう。

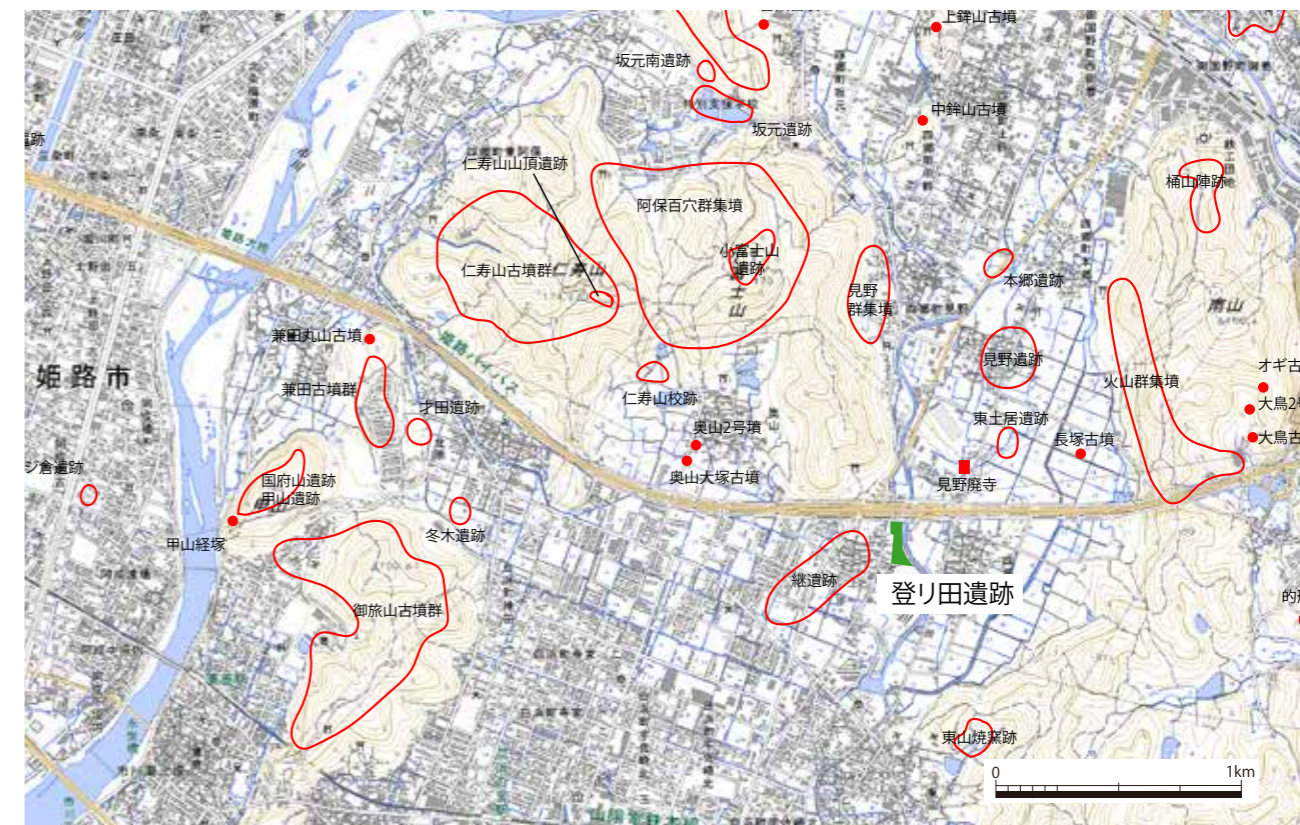


兵庫県教育委員会
公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター
埋蔵文化財調査部 URL : <http://www.hyogo.ctc.or.jp>

継潮	火君等祖	継潮者昔此国有一死女爾時筑紫国	弥濃郡人到来居之故号美濃所以称	美濃里 <small>継潮</small> 土下中右号美濃者讚伎国
----	------	-----------------	-----------------	-----------------------------------

『播磨国風土記』より

『風土記（上）』（角川ソフィア文庫、2015年）を一部改変



はじめに

（公財）兵庫県まちづくり技術センターでは、兵庫県教育委員会から委託を受け、7月より姫路市継地区で登り田遺跡の発掘調査を行っています。調査面積約 5,261 m²のうち北側のA区について現地説明会を行います。

今回の調査では、古墳時代の溝、飛鳥時代の土坑、飛鳥～平安時代の建物群などが見つかりました。

1. 建物群の調査

中央施設の調査 調査区の北西側、一段高くなった場所から多くの柱穴を検出しました。SB01は3間×3間（6.5m×8.5m）の掘立柱建物跡です。南北に長く、建物の方向はほぼ正方位を示しています。現在調査中で、さらに建物が増える可能性があります。

そのほか建物の北側に道と思われる切通の遺構（SF506ほか）があります。SF506には道に沿って土留めの柱穴があり、道からは10世紀ごろの須恵器椀が出土しており、もっとも新しい建物は平安時代ごろと考えられます。

建物より東側は造成されており、さらに古い建物（飛鳥～奈良時代）が建っていたと思われま。



A区全景（北から）



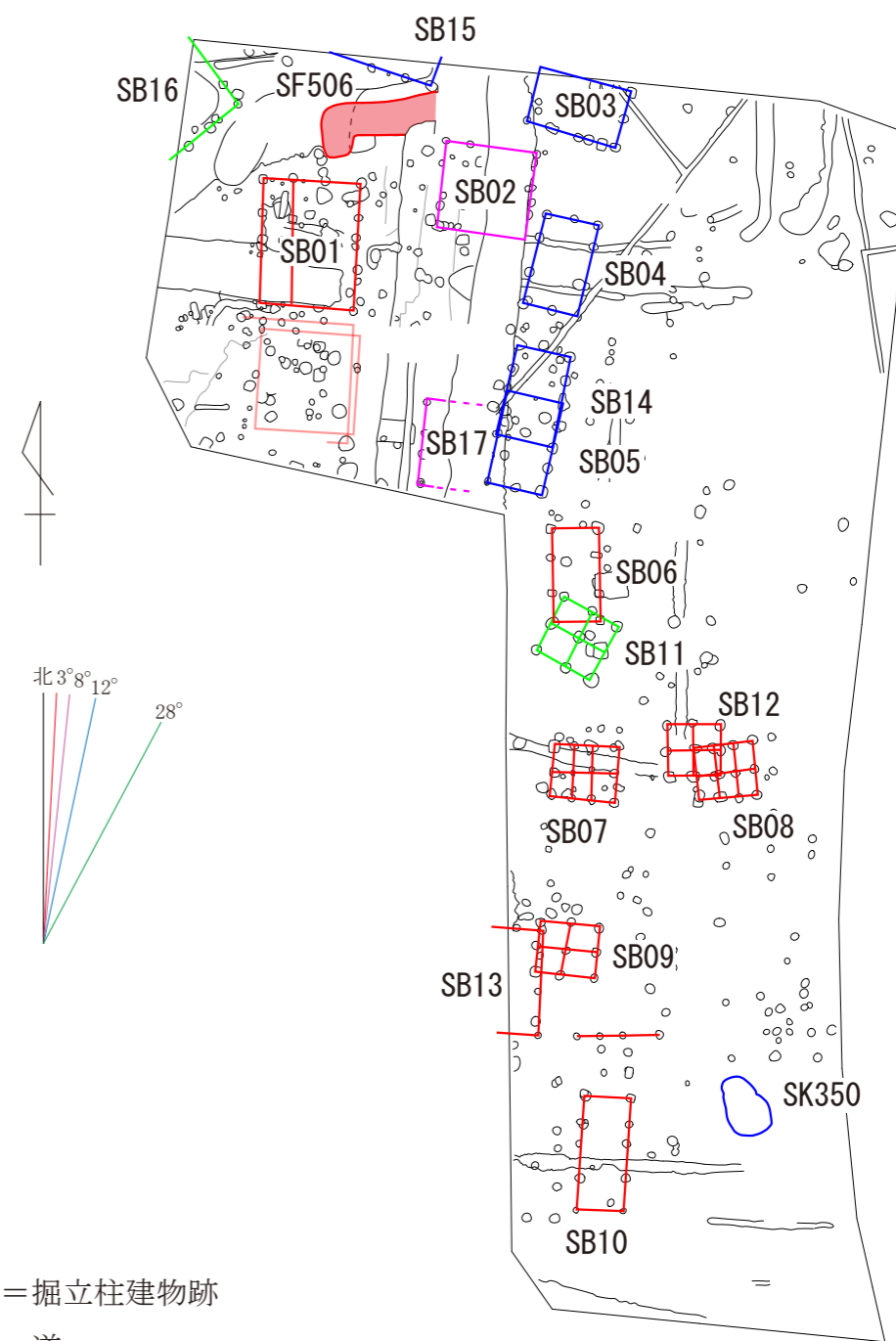
検出した柱と礎板石

配置された建物と蔵 中央建物より低い場所から多くの建物群を検出しました。建物の方向は2種類以上あります。SB03・04・05・14・15（青色）は、方位を東へ約12°振った2間×3間の建物群です。SB03・04・05は約6mの間隔を空けて配置されています。SB03・15は長軸を東西方向にとっています。

SB06・07・08・09・10（赤色）は、方位を東へ約03°振ったほぼ正方位の建物群です。SB02とSB17（赤色）は並んで建っていたと思われます。

ほかに2間×2間の総柱建物と1間×3間の細長い掘立柱建物があります。総柱建物は倉庫と考えられます。SB11（緑色）の1棟のみが、方位を東へ約28°振った総柱建物です。飾磨郡条里の方向に沿っていると思われます。

また、建物の特徴として、多くの柱穴から石が出土しています。周辺の地盤は、川が近く砂地で軟弱なため、建物が沈まないように柱の下に礎板石を敷いていました。



SB=掘立柱建物跡
SF=道
SK=土坑

0 (1:500) 20m

遺構配置図